

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第9輯

阪南丘陵埋蔵文化財

—— 試掘調査報告書 ——

1 9 8 7

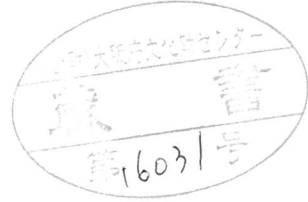
財団法人 大阪府埋蔵文化財協会



調査地全景



第10地点全景



序 文

関西国際空港本島及び前島造成用土砂採取地のひとつである阪南町箱作南部丘陵周辺（阪南丘陵開発事業）の埋蔵文化財分布・試掘調査を本協会が担当して実施していますが、本年度はその2年目にあたります。当該地における考古学調査はあまり進んでおらずこれまでは数箇所古墳、集落跡が知られているだけで、遺跡の分布密度は決して濃いものではありませんでした。昨年は土砂採取事業予定地内の分布調査を行い新たに21箇所への遺跡、散布地、石造物等を発見し、当地域の歴史の解明の糸口をつかむことができました。特に3箇所の石切場跡を発見したことは、近世～近代に広く流通した和泉砂岩製品の生産形態を考える上できわめて注目されるものと申せましょう。

今年度は石切場跡1箇所を含む5遺跡の試掘調査を行い、その結果は本書に収録している通りであります。その結果、箱作ミノバ石切場跡及び金剛寺遺跡の発掘調査を実施することになりました。今後も阪南丘陵開発事業の進捗にともなって埋蔵文化財の調査を万全の体制でもって調査・研究を遂行してゆく所存であります。

調査を実施するにあたり、大阪府教育委員会、大阪府企業局、阪南町、阪南町教育委員会その他地元関係者の皆さまには多大なるご協力、ご支援を賜り、深く感謝いたします。また、今後の調査にご協力、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

昭和62年1月

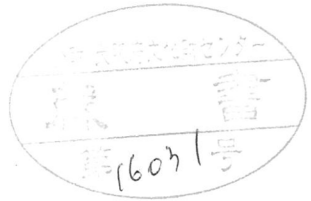
財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

理事長 浅野素雄

例 言

- 1 本書は大阪府埋蔵文化財協会が大阪府教育委員会文化財保護課の指導に基づき大阪府企業局内陸整備課の委託を受けて実施した大阪府泉南郡阪南町の関西国際空港建設工事に伴う阪南丘陵開発事業予定地内遺跡の埋蔵文化財の試掘調査報告書である。
- 2 調査は大阪府埋蔵文化財協会調査課第5班（岩崎二郎・田中晋作・田中龍男・服部みどり）が担当し昭和61年6月2日現地における調査を開始した。
- 3 当初計画していた7遺跡のうち11月1日までに5遺跡の調査を完了したが、残り2遺跡は諸般の事情により調査が実施できず、今回は調査終了した5遺跡のみその試掘調査結果を報告する。
- 4 調査の実施に当たっては大阪府教育委員会文化財保護課、大阪府企業局内陸整備課、阪南町丘陵開発対策室、阪南町教育委員会社会教育課の指導・助言・協力を受けた。
- 5 試掘トレンチの実測に際しては、調査区周辺に設置した4級基準点からトレンチの四隅を観測してその座標値を算出し、当協会調査規定に基づく区割りの4m方眼上の位置を出して今後の調査に備えた。
- 6 本書の挿図の方位は座標北、標高はT.P.である。
- 7 本書の原稿執筆、挿図整図、写真撮影は各担当者により、写真現像・焼付けは当協会調査課資料係による。
- 8 昨年の分布調査成果のうち未公表部分を本書第III章に収録した。その執筆は調査課第3班渡辺昌宏、田中一広、第6班渋谷高秀（旧3班）による。
- 9 各章の文責は下記の通りである。

第I章	岩崎	第IV章第1節	田中（晋）・田中（龍）
第II章	田中（晋）	第2節	田中（晋）・田中（龍）
第III章第1節	田中（一）	第3節	田中（晋）・田中（龍）
第2節	田中（一）	第4節	田中（晋）・田中（龍）・服部
第3節	渋谷	第5節	田中（晋）・田中（龍）・服部
第4節	渡辺	第V章	岩崎



目 次

第I章 調査の経過	1
第II章 立地と環境	2
第III章 分布調査報告	5
第1節 はじめに	5
第2節 調査区の設定と調査方法	5
第3節 調査の成果	7
第4節 まとめ	19
第IV章 試掘調査の成果	21
第1節 茶屋遺跡	21
第2節 稲丸遺跡	24
第3節 飯ノ峯畑遺跡	28
第4節 金剛寺遺跡	31
第5節 ミノバ石切場跡	37
第V章 ま と め	45

挿 図 目 次

第1図 ミノバ石切場跡から大阪湾を望む	2
第2図 周辺遺跡分布図	3
第3図 和泉石石匠の図	4
第4図 遺物散布密度分布図	8
第5図 石器剥片類散布地点分布図	16
第6図 須恵器・土錘散布地点分布図	17
第7図 東播系擂鉢・瓦器散布地点分布図	18
第8図 茶屋遺跡トレンチ位置図	21
第9図 茶屋遺跡トレンチ断面図	23
第10図 稲丸遺跡トレンチ位置図	25

第11図	稲丸遺跡所在石仏・石祠	26
第12図	稲丸遺跡トレンチ断面図	27
第13図	飯ノ峯畑遺跡トレンチ位置図	29
第14図	飯ノ峯畑遺跡トレンチ断面図	30
第15図	金剛寺遺跡トレンチ位置図	32
第16図	第5トレンチ出土瓦器	32
第17図	金剛寺遺跡トレンチ断面図	33
第18図	第9トレンチ出土土錘	34
第19図	第14トレンチ出土羽釜	34
第20図	第15トレンチ石列	35
第21図	第15トレンチ出土土器	36
第22図	第15トレンチ出土瓦	36
第23図	第18トレンチ出土土器	37
第24図	ミノバ石切場跡平面図	38
第25図	第1・2トレンチ断面図	39
第26図	10—OX 断面図	40
第27図	10—OX 出土石製品	42
第28図	10—OX 出土鉄製品	43
第29図	ミノバ石切場跡加工場・未製品分布図	44

図 版 目 次

図版1	阪南丘陵航空写真	図版9	ミノバ石切場跡現況（遠景）
図版2	茶屋遺跡遠景・第7トレンチ	図版10	ミノバ石切場跡現況（近景）
図版3	稲丸遺跡第1・2トレンチ	図版11	ミノバ石切場跡コップ散乱状況
図版4	稲丸遺跡遠景・第7トレンチ	図版12	ミノバ石切場跡10—OX
図版5	飯の峯畑遺跡遠景・第5トレンチ	図版13	ミノバ石切場跡10—OX
図版6	金剛寺遺跡第6・13トレンチ	図版14	ミノバ石切場跡10—OX
図版7	金剛寺遺跡第12トレンチ	図版15	ミノバ石切場跡第1・2トレンチ
図版8	金剛寺遺跡出土遺物	図版16	ミノバ石切場跡出土遺物

第 I 章 調 査 の 経 過

関西国際空港建設のための土砂採取地数カ所のうちのひとつに阪南町南部の丘陵地帯が選定され、当該地域の文化財調査の必要性が生じた。そのため昭和60年7月大阪府教育委員会文化財保護課と大阪府企業局地域整備部内陸整備課との間の協議が行われ、その結果に基づいて大阪府教育委員会は財団法人大阪府埋蔵文化財協会に分布調査の実施を指示した。同年9月協会と企業局との間で調査の委託契約が結ばれ、9月26日より調査準備に取り掛り、10月8日から11月20日の間に現地調査を実施した。ひき続き整理作業を行い11月30日報告書を刊行した。分布調査の成果により土砂採取事業範囲内に21個所の遺跡、遺物散布地及び石造物等が発見された⁽¹⁾。

本年度はそのうち7遺跡の試掘調査を計画し、61年5月協会と企業局との間に委託契約が結ばれ、6月2日から現地における調査を開始した。6月2日から10日の間貝掛遺跡の一部の調査を実施したが、田植えのため中断した。6月11日から稲丸遺跡の伐木・伐開を行い、6月12日からは茶屋遺跡の試掘調査を行い7月1日終了した。7月2日からは稲丸遺跡の試掘調査に着手し7月24日終了した。それに先立つ7月15日にはミノバ石切場跡の伐木・伐開作業を開始した。7月28日から飯の峯畑遺跡の試掘調査を実施し8月6日終了した。金剛寺遺跡は7月7日調査に着手していたが一時中断し、8月5日に再開して8月25日終了した。ミノバ石切場跡については9月下旬まで準備工を行い、9月25日から第10号石材採掘場（10—OX）他の掘削を開始し11月1日終了した。

このように5遺跡の試掘調査を終了したが、残りの貝掛、箱作今池の2遺跡は水稻の収穫待ちその他諸般の事情により調査が完了できず、とりあえず試掘調査を終了した5遺跡のみの調査結果について報告することとなり、整理作業に着手した。その間、残り2遺跡の調査に着手すべく関係各方面の努力があったが、契約期間内に調査を実施することはできなかった。また、井山城跡の試掘調査のうち伐開・伐木作業を本契約内で実施し、整理作業とともに12月25日事業を終了した。

(1) 財団法人大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第3輯『関西国際空港建設に伴う阪南町内埋蔵文化財分布調査報告書』1985. 11. 30

第II章 立 地 と 環 境

阪南町は、町域の大部分を占める和泉山脈主相部と同前衛山地、男里川によって形成された沖積平野、そして、和泉山脈前衛部西縁にとりつく狭隘な段丘、丘陵部からなる。

和泉山脈主相部、同前衛山地部分の和泉層群は、礫岩、砂岩ないし砂岩・泥岩のさまざまな厚さの律動的互層で特徴づけられるものである。これらの互層は、東西方向に走向し、南に傾斜

する向斜傾向をみせる。ここにみられる砂岩は、中粒から細粒の緑色をおびた淡灰色系の均質なもので、通称「青石」と呼称される硬質のものである。⁽¹⁾

阪南町域における考古学的知見を概述すると、現在確認されている最古のものは、縄文時代草創期に入る有舌尖頭器などが採集されている蓮池遺跡である。また、男里川に面した丘陵北側縁辺部に位置する玉田山遺跡・寺田山遺跡・石田山遺跡でも石鏃などが採集されており、縄文時代に属する遺跡であると推定されている。しかし、いずれも土器が知られておらず詳細は不明である。

弥生時代では、神光寺遺跡で方形周溝墓の存在が確認されているのみ⁽²⁾で、集落などの様相は不明である。しかし、蓮池遺跡・三味谷遺跡・田山遺跡・三升五合山遺跡で中期から、後期にかけての土器、石器などが認められており、今後の調査によって明らかにされていくものと考ええる。

古墳時代では、蓮池遺跡や田山遺跡で土器などが認められるのみで、弥生時代同様、集落などの様相は不明である。

一方、古墳では、中期に入るものと推定される全長38mの帆立貝形古墳、箱作古墳が初現のものと考えられている。本墳は、茶屋川左岸段丘上に位置したもので、すでに消滅しており、残念ながらその詳細は不明である。古墳の築造は、箱作古墳以降若干の空白期が介在し、後期後半になって玉田山古墳群・塚谷古墳群・高田山古墳群が形成されている。



第1図 ミノバ石切場跡から大阪湾を望む

これらの古墳群は、いずれも数基から構成される小規模なもので、横穴式石室、箱式石棺⁽³⁾の混在や小竪穴式石室が認められ、周辺地域の後期古墳の動向とよく符合するものといえる。

また、海浜部では、製塩土器、蛸壺などが採集されており、この部分についても今後の解明がまたれる。

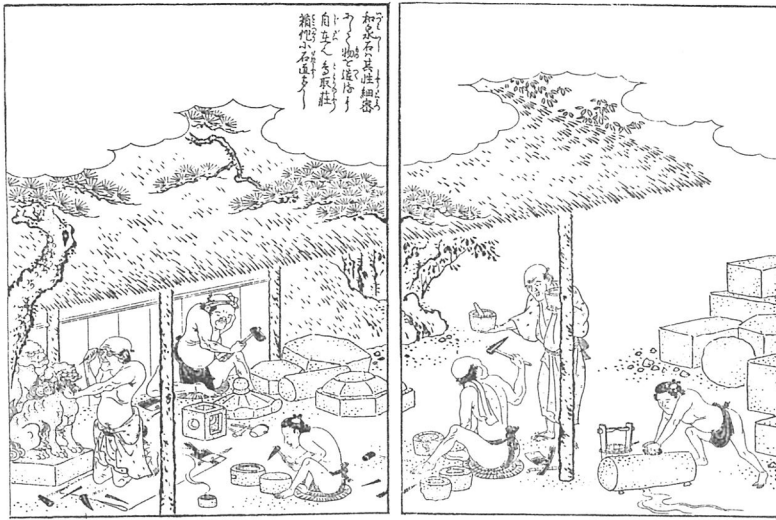
奈良時代には、田山遺跡においてまとまった遺物が出土しており、集落の存在を裏づけるものと考えられる。また、寺院址については、平安時代に入り長楽寺・平野寺などの出現をみるが、現在のところ奈良時代に遡るものは知られていない。

平安時代以降、宮作荘、鳥取荘の二荘が立てられている。前者は、上加茂神社領、後者は、観心寺領あるいは皇室領といわれ、室町時代には伊勢神宮領となっているもので、中世以降の採集資料の増加がこれを裏づけるものと思われる。また、南北朝時代には、北朝に属する淡輪助重が井山城を拠点にしてこの争乱に加わっていたことが知られている。



- | | | | |
|-------------|-----------|--------------|--------------|
| 1 神光寺(蓮池)遺跡 | 7 貝掛遺跡 | 13 箱作今池遺跡 | 19 茶屋遺跡 |
| 2 三味谷遺跡 | 8 塚谷第1号墳 | 14 飯ノ峯畑遺跡 | 20 箱作仏屋谷石切場跡 |
| 3 三升五合山遺跡 | 9 塚谷第2号墳 | 15 稲丸遺跡 | 21 箱作細谷石切場跡 |
| 4 石田山遺跡 | 10 塚谷第3号墳 | 16 井山城跡 | 22 田山遺跡 |
| 5 井関遺跡 | 11 金剛寺遺跡 | 17 箱作ミノバ石切場跡 | |
| 6 師道谷遺跡 | 12 四郎太郎遺跡 | 18 箱作古墳 | |

第2図 周辺遺跡分布図



第3図 和泉石石匠の図（『和泉名所図会』より）

一方、紀伊にあっては、中世以降、根来寺、下って本願寺の後楯となる雑賀一向衆が大きな力を持ち、これに対する諸勢力が阪南町域を行きかい、この地が政治、軍事、交通の拠点として重要な役割を果たしている。

近世に入り、阪南町域のもつ大きな特質のひとつとして和泉砂岩の採石があげられる。和泉砂岩の採石は、『新撰姓氏録』に記載されている和泉石作連、堺市二本木山古墳の割竹形石棺、同乳の岡古墳の長持形石棺の一部に和泉砂岩が使用されているといわれ、また、日葉酢媛陵の石棺製作伝承などから、石工の活動が比較的古くまで遡るものと考えられる。しかし、西日本を中心とした和泉砂岩の拡散と石工の移動は、近世に入ってからのもものとみられ、墓石、燈籠、鳥居、石柱、石臼、建築資材をはじめとする各種石造品が箱作、尾崎の港から搬出されている。このような販路の拡大は、必然的に生産拡大に拍車を掛けたようで、黒田村、新村、貝掛村などを中心に大規模な石切りが行われ、これにともなう洪水の誘発などに関する多くの争議文書が残されている。

以上、阪南町域の考古学的知見を中心に概要を述べてきたが、いまだ不明な部分が多く残されており、今後の詳細な調査がまたれる。

- (1) 『岸和田市史』1981、市原実・市川浩一郎・山田直利『岸和田地域の地質』（『地域地質研究報告』）1986
- (2) 阪南町教育委員会『神光寺跡発掘調査報告書』1982
- (3) 西山要一『淡輪磯山古墳群』1980
- (4) 働大阪文化財センター『田山遺跡』1983 主要参考文献『阪南町史』1983

第Ⅲ章 分布調査報告

第1節 はじめに

本協会は、大阪府教育委員会の指導に基づき大阪府企業局の委託を受けて、昭和60年9月26日より11月30日の契約で関西新空港建設に伴う空港島埋め立て用土砂採取予定地内の文化財分布調査を実施した。現地調査は調査課第三班（渡辺、渋谷、田中^(一)）が担当し、10月8日から11月20日まで行った。

それら予定地内の文化財分布調査結果については、すでに報告書⁽¹⁾を刊行している。しかし、平地部分における遺物採集地点とその時代毎の点数など詳細な基礎データの全容については、時間的制約により公表が遅れていた。今回は、その点に主眼を置いた追加報告である。

- (1) 渡辺昌宏・渋谷高秀・田中一広『関西国際空港建設に伴う阪南町内埋蔵文化財分布調査報告書』（財大阪府埋蔵文化財協会 1985. 11）これに基づいて大阪府教育委員会では、報告済みの石切場跡、城跡、散布地等21箇所を埋蔵文化財として『大阪府文化財分布図 改訂版』（1986）に収録している。

第2節 調査区の設定と調査方法

分布調査を行った地域は、阪南町積迦坊川水系の貝掛、茶屋川・飯ノ峯川水系の箱作・飯ノ峯畑である。これらは、海岸平野部から谷筋、和泉山脈の山岳部をも包括するものである。調査対象地は、市街地も含み水田及び畑地から山林、荒地など約326ヘクタールの広大な面積に及んでいる。

調査区は、調査地が広大な範囲に及ぶため、まず平地部と山地部に大きく二分した。更に水系により平地部を二分（D・E地区）、山地部を三分（A・B・C地区）した。特にA地区については、A1～A7に小分けをして踏査した。

本協会では調査区の地区割りを国土基本法に基づく新平面直角座標、新版1/2,500都市計画地形図の国土座標軸を基準とすることをきめている⁽¹⁾。分布調査においては、地区割りを、地形と切り離すべきではなく水系ごとに完結した地域として捉えるべきと考え、水系で地区を設定した。試掘、発掘調査で採用している地区割り（地図上の100mメッシュ以下の地区割り）は不可能である。しかし遺物取り上げにあたって地点名称の単位は500m区

画、さらに01～25の数字で示した100m 区画を、調査区名称、田、畑番号と共に遺物取り上げ地点として使用した。

具体的な調査方法は、地表面の観察と遺物採集を基本として行い、新版1/2,500地形図で系統立てて踏査した。地形の変化など人為的行為が認められたところは範囲を確認してエスロンテープで計測、それぞれ記録を作成した。険しい地形と季節的影響でシダ、雑草、木が茂り表面の観察は容易でなかったが、下草を刈って遺構の性格を明らかにすることにも努めた。さらに景観が一変してしまうことが予想される為、石造物等の有形文化財についても発見した場合は、地点を押さえると共に写真撮影等の記録を作成した。また『和泉名所図会』に見える石切場跡、「井山城」の伝承を持つ山城跡についても検討を重ねた。

平地部では、遺物散布状況を把握するため散布密度から遺跡の範囲を想定する事に主眼をおいた。また遺物散布は複数のまとまりを持つ事が当然予想されたので、田畑一枚を一単位とし、横一列に歩行して踏査し、遺物の採集に努めた。しかし、限定された範囲での調査であったため、遺跡総体を把握する点で欠落する部分も残されたが、できるだけ遺跡の性格を追求しようと試みた。その方法と目的は次に示す通りである。踏査不可能な道路、河川、盛り土、市街地、荒れ地は除外し、田畑、果樹園を対象とし、地割り一枚を基本単位とした⁽²⁾。水田、畑地一枚に一つ番号を付け1～271番の番号を付した。すなわち遺物採集は、この単位ごとに実施し、一枚が一袋になる。さらに一袋ごとに遺物登録台帳を作成した。

散布密度を把握する方法として、破片数計算を行った。採集遺物は、土器、石器の小破片が多く、風化も激しかった。判断困難なものも多く存在したが、形態、手法、胎土、焼成、色調等を基準に分類し、破片の大小を問わず一点ずつ観察し一覧表化した。これらの作業を通じて、釈迦坊川、茶屋川・飯ノ峯川水系の遺物散布密度分布図(第4図)、遺物別散布地点分布図(第5～7図)、採集遺物の地点別分類表(第1表)を作成した。

平地部に於ては、調査対象が限定された範囲内に止まるなどの問題点を残しながらも、分布調査という基礎的作業を通じて遺跡等のあり方をできるだけ認識するという観点で作業を実施した⁽³⁾。今後に予定される試掘及び発掘調査の結果と照合することによって、今回実施した分布調査の方法が発展的に検証されよう。

- (1) マニュアル検討委員会編『発掘調査規定 VOL.1』(勸大阪府埋蔵文化財協会 1985, 6)
- (2) 水田と畑地のちがいの面積にはバラつきがある。むしろ面積は、地形に左右されており遺跡総体の結果と合致すると考えた。
- (3) 釈迦坊川、茶屋川・飯ノ峯川流域一帯は地形的にも歴史的にも一つのまとまりを持つ小地域として認識可能である。その意識のもと、大規模開発が迫った状況で実施される分布調査の重要性を考慮に入れ、調査方法、計画の検討等を行った結果による。
また、その散布傾向と地籍図の字名との関係を考慮にいて調査したが、その成果を十分に検討し得ていない。地籍図の字名については、阪南町教育委員会の御教示をいただいた。

第3節 調査の成果

1 遺物表面採集調査

分布調査の対象となった地域は、釈迦坊川、茶屋川周辺の平野部と山岳部、合わせて約326ヘクタールである。地形的に山岳部と平地部に大きく二区分される。分布調査は、山岳部については、地形図から想定される遺跡の概念を一切捨象し、尾根線上、谷底地、傾斜地など山地の全ての地表面を調査対象とし、平地部については、道路、河川、盛土、屋敷地など踏査不可能地域を除外し、残りの田畑、果樹園などを対象として実施した。平地部は、水田一枚に番号を付し、これを一単位に調査を実施した。

水田一枚を一単位に採集した遺物は、一点ずつ観察をおこない、一覧表化した(第1表)。採集遺物は、石器、須恵器、瓦器、土錘などであるが、風化が激しく微細な小破片である。採集遺物を一覧表化するにあたっては、一遺物を複数の担当で検討した。また観察の際の約束については次の基準を設定した。

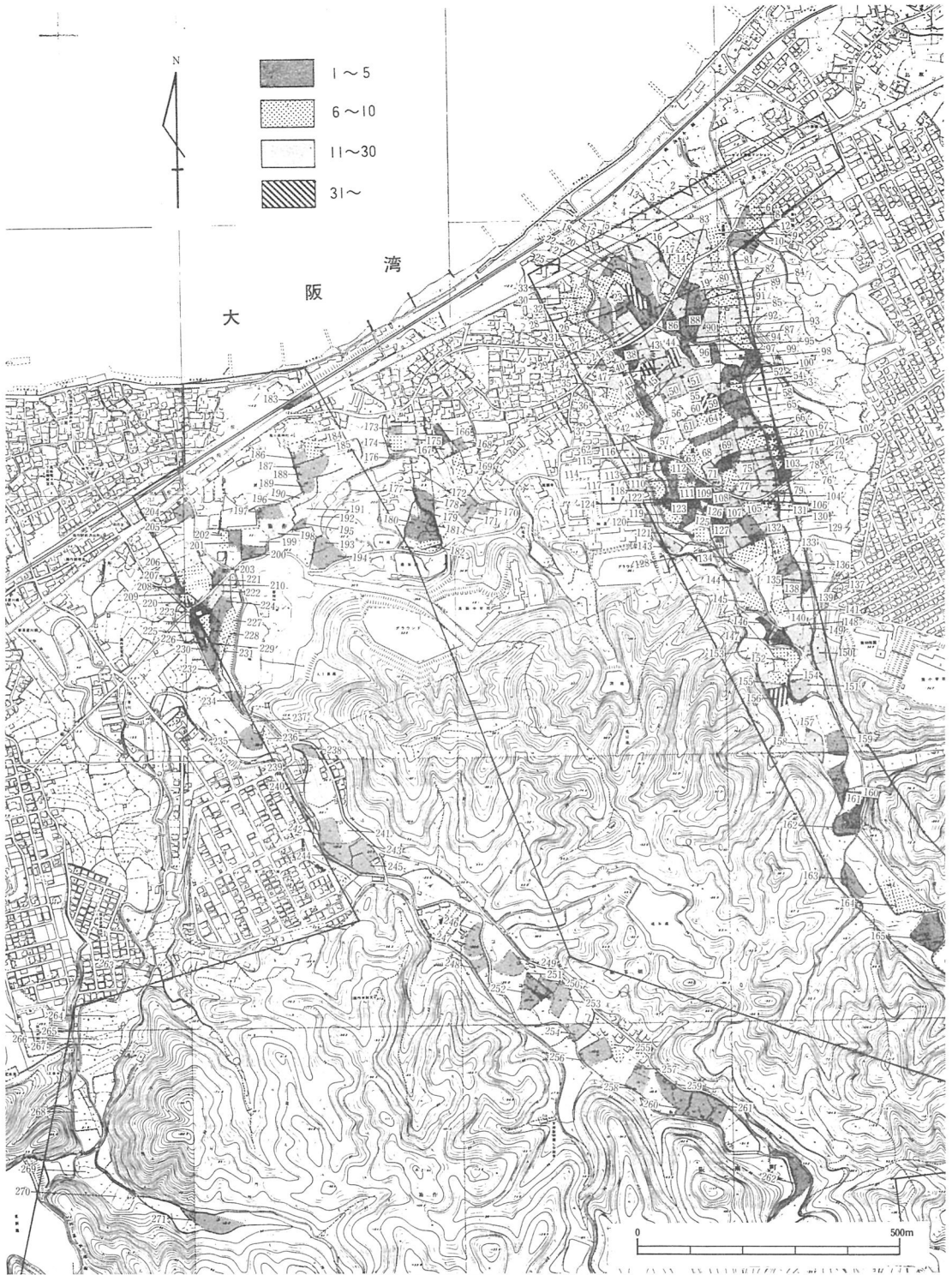
- (1) 土器片、石器片の破片の大小については問題とせず、全て一点として数量化する。
- (2) 採集遺物は微細な小破片のため、時期の限定は困難である。確実に時期の限定できる遺物についてのみ、備考欄に時期記入をおこなった。

2 遺物表面採集調査結果

採集遺物は、一覧表化した後、2,500分の1の地図に水田、果樹園等を一単位に表示し(第4～7図) 時期別分布の傾向や、遺物分布密度を把握するための基礎資料とした。

採集遺物は総量としては少ない。遺物分布密度は、茶屋川水系に比べて釈迦坊川水系の方が多く、全域にほぼ一律に分布する。更に各河川別にみると、釈迦坊川水系は、下流域に比べて上流域にも比較的遺物が分布し、茶屋川水系は、上流域に比較して下流域の方に集中して遺物が分布し、上流域は希薄であることが判明した。

採集遺物は、縄文時代から近世までの各時代に属する。江戸時代のものが多い。



第4图 遺物散布密度分布图

第1表 採集遺物分類表

釈迦坊川水系

	字名	土師器	須恵器	瓦器	陶磁器	瓦	計	石器類			土鏡	鉄製品	銅壺	その他明	備考
								石包丁	石鏃	剥片					
1	不明	4			4		9						1	瓦器—14世紀代	
2	不明	1			25		26								
3	不明		1	1	13		15							須恵器(蓋)—7世紀代	
4	半崎高田	4	1	1	9		15								
5	三作	2			4		6								
6	小原道端	4			3		7			1					
7	小原				2		2								
8	花折				4		4								
9	池森池	3			5		8								
10	花折				2		2								
11	野添									1					
12	花折	3			6		9								
13	鍬田	2		1	8		11							瓦器—14世紀代	
14	筋違道	1		1	6		8								
15	シミ田	7	5	3	13		28							須恵器(蓋)—7世紀代	
16	宗内	7	2		2		11							須恵器(蓋)—7~8世紀代	
17	筋違道	2	2		7		11								
18	渡り瀬	1					1								
19	涙が頼	3			1		4			1					
20	ヨイ田	2			3		5								
21	下嶋	5			13		18								
22	嵐	3			4		7			3					
23	ヨイ田	34	16	3	32		85	1	1					須恵器(蓋)7~8世紀代	
24	渡り瀬	3					3								
25	下嶋	1			6		7			1	1				
26	下嶋	1			2		3								
27	島畑	10			19		29			1					
28	池女	1			4		5								
29	嶋	2			10		12			1					
30	茶ノ木原	4			3		7				1	2		青磁—中世	
31	ハサマ	1			2		3							銅壺—室町時代	
32	釈迦坊	1			3		4		1	1				石鏃—縄文時代	
33	釈迦坊	2			1		3								
34	畑田	5					5								
35	畑田	2			17		19								
36	畑田	1			8		9			1					
37	畑田						0								
38	四部太郎小池谷				3		3								
39	九本屋敷	5		1	16		22				1				
40	九本屋敷	5			6		11								
41	石風呂	5			2		7							青磁—16世紀代	
42	不明		1		2		3							須恵器—古墳時代後期	
43	家下	13			7		20								
44	札揚下														
45	札揚東	5		1	43		49			1					

	字名	土師器	須恵器	瓦器	陶磁器	瓦	計	石器類			土錘	鉄製品	銅壺	その他	備考
								石包丁	石鏃	剥片					
46	門前	5			18		23								
47	札揚	3			7		10			1					羽釜—紀伊型か?施釉椀室町時代
48	井ノ元	7			8		15								青磁椀、瓦片—中世
49	井ノ元	3			35		38			2					管状土錘—古墳時代
50	舞ノ上	9			15		14			1	1				東播系揃鉢—14世紀半代
51	舞ノ上	5		1	8		14		1	2					チャート石鏃—縄文時代
52	池詰	1		2	2		5								
53	原池ノ西			1	5		6								
54	舞ノ上	2		1	10		13								
55	舞ノ上				4		4								
56	塚ノ本				1		1								
57	渚尻						0								
58	池詰	1			1		2			1					
59	舞ノ上	9		2	25		36			1					
60	舞ノ上						0								
61	塚ノ本	7	1	1	15		24			1	1				須恵器(蓋)—6世紀末
62	塚ノ本				4		4			1					磁器—中世
63	遺上り	3			6		9			1					
64	舞ノ上	2		2	2		6								
65	舞原池上			2	2		4								
66	溝ノ尾	4		5	8		17			2					
67	長田			1	2		3								
68	早川						0								
69	治へ郎作	5		2	14		21								
70	遺上り	4		2	9		15								
71	溝ノ尾	4		1	7		12								
72	平造田	1					1			1					
73	溝ノ尾	2			5		7								
74	溝ノ尾	2		1	17		20			1					
75	溝尾	2		2	12		16								
76	小日部	3		1	5		9								
77	瀧ノ淵	1		5	16		22								瓦器椀—14世紀代
78	溝ノ尾	5			4		9				1				銅壺—室町時代
79	瀧端	1		2	8		11								
80	花折	2			7		9								
81	七町	4		1	10		15						1		染付おはじき有り
82	鞍田	2	2		13		17								須恵器(蓋)—古墳時代後期
83	茶屋向イ		1				1								
84	茶屋向イ		1		2		3						1		
85	茶屋向イ	9		1	14		24								
86	戎田		1		4		5								
87	茶屋向イ				1		1								
88	茶屋向イ	2		1	2		5								
89	大畝町	2			3		5								
90	大畝町	3		1	22		26	1		1					管状土錘—古墳時代前中期
91	丸田	2			4		6								

	字 名	土師器	須恵器	瓦 器	陶磁器	瓦 計	石 器 類			土 錘	鉄製品	蛸 壺	その 他明	備 考
							石包丁	石鏃	剥片					
92	鐘 突 免	3			7	10				1				磁器一中世
93	池 ノ 尻	6			1	7								
94	鐘 突 免	3			4	7				1				
95	渡 り 頼	1			1	2								
96	桝 田					0								
97	涙 が 頼				1	1								
98	原 池 の 尻					0								
99	原 池 の 尻				2	2								
100	原 池 の 尻				2	2								
101	溝 ノ 尾	1			5	6								染付おはじき有り
102	溝 ノ 尾	1			7	8			1					
103	高 畔				1	1								
104	瀧 溝				4	4			2	2				
105	瀧 ノ 湧			1	6	7								
106	瀧 ノ 湧				2	2				1				
107	瀧 端	1		1	10	12			1	2				
108	瀧端瀧ノ端	2			12	14				1				
109	官ノ向ヒ				3	3								
110	早川深田				5	5								
111	早川深田	1			6	7								
112	遺 上 り				6	6								
113	閉				1	1								
114	閉				1	1								
115	池 ノ 尻	2				2								
116	新池ノ尻	4			6	10				1				
117	宮 本	3		1	2	6								
118	深	4			3	7								
119	深 藪	1			5	6								
120	瀧 ノ 谷				2	2				1				
121	深 藪				7	7								磁器 1点一中世
122	深 田	1			3	4								
123	深 田				2	2								
124	深 田				2	2								
125	官ノ向ヒ													
126	深 藪				4	4								
127	深 藪				2	2				1				
128	垣 外 田	5			6	11								
129	垣 外 田	3			8	11				1				
130	垣 外 田				5	5								
131	湯 上 田			1	17	18				1				
132	原 ト			2	9	11								
133	原 ト	1			6	7								
134	坂 久 保	3		3	6	12								
135	畦 町													
136	原 ト	1			2	3								
137	原 ト					0				2				

	字 名	土師器	須恵器	瓦 器	陶磁器	瓦	計	石 器 類			土 錘	鉄製品	蛸 壺	そ 不 の 他 明	備 考
								石包丁	石 鏃	剥 片					
138	塚 谷 口	1		4	7		12								
139	塚 谷 口	4		2	12		18			2					
140	塚 谷 口														
141	塚 谷 口	2			8		10								
142	山 崎			1	4		5								
143	免ノ口	2			11		13								
144	免ノ口	2		2	7		11								
145	尼 ブ チ				5		5		1	1					
146	尼 ブ チ				2		2								
147	塚 谷 口	2			1		3								
148	塚 谷 口	4		1	10		15								
149	塚 谷 口	2			9		11			1					
150	向ノ辻	4			7		11			1					
151	暗 が り	1		4	8		13								
152	下 湯 口	1		2	3		6		1						
153	寺 井														
154	下 湯 口				6		6								
155	寺 井			1	14		15			1					
156	宮 本	3			20	1	24								瓦1点-室町時代
157	寺 井			5	5		10								
158	寺 井				12		12								
159	寺 井				2		2								
160	寺 井				3		3								
161	池 谷 口														
162	井 ゴ				3		3								
163	井 ゴ	2			1		3		1						石鏃-弥生時代
164	作 り 道	1			5		6								
165	栗 林			1	2		3								

：飯ノ峯川水系

166	内 畑				4		4							1	染付おはじき有り
167	内 畑	1			27		28								
168	不 明	1			3		4								
169	南 畑	2	1		4		7								東播系播鉢-12後半~14世紀代
170	的 場				3		3								
171	的 場				4		4								
172	的 場				5		5								
173	キナ垣外	1			2		3								
174	元 屋 舗	1			5		6								
175	元 屋 舗	4			9		13								
176	藤 谷	1			1		2								
177	藤 谷	1			4		5								
178	藤 谷				1		1								
179	藤 谷				2		2								
180	藤 谷				3		3								
181	天 井 谷	2			2		4								

	字 名	土師器	須恵器	瓦 器	陶磁器	瓦 計	石 器 類			土 錐	鉄製品	蛸壺	そ 不 の 他 明	備 考
							石包丁	石鏃	剥片					
182	天 井 谷	2			8		10							
183	西 出	3		1			4							
184	西 出	1			8		9							土師器—古墳時代後期～奈良時代
185	西出畑ケ	1			6		7							
186	今 池 東				2		2							
187	今 池 東				2		2							
188	今 池 東				1		1							
189	今 池 東		1				1							須恵器(甕)—古墳時代後期
190	池ノ上	8			3		11		2					
191	池ノ上													
192	地 獄 谷													
193	地 獄 谷			1	1		2							磁器—中世
194	地 獄 谷				1		1							
195	今池ノ上	2			3		5							
196	池ノ上	5		1	11		17		2					
197	池ノ上	1		2	1		4							
198	池ノ上	3			7		10		4					
199	池ノ上													
200	池ノ上		1		2		3							
201	池ノ上				1		1							
202	池ノ上				7		8		1					
203	池 尻	1					1							
204	林 添				1		1							
205	林 添													
206	林 添	8	1	7	3		19							
207	林 添	1		1	4		6							
208	林 添				2		2							
209	林 添	2	1		7		10							
210	林 添	4			6		10							
211	不 明													
212	不 明													
213	不 明													
214	不 明													
215	不 明													
216	不 明													
217	不 明													
218	不 明													
219	不 明													
220	林 添	3			6		9							
221	池 尻	8	1	1	4		14		2			1	管状土錐—古墳時代 前・中期	
222	タニラ	8	1	2	2		13			1				
223	林 添	1		1			2		1					
224	池 尻				3		3							
225	不 明	1		3	3		7							
226	不 明				1		1							
227	池 尻	1			6		7							磁器—中世

	字 名	土師器	須恵器	瓦 器	陶磁器	瓦	計	石 器 類			土 鏡	鉄製品	銅 壺	そ 不 の 他 明	備 考
								石包丁	石 鏃	剥 片					
228	池 尻	3			3		6								
229	林 添		1	1	3		5								須恵器(杯)―7世紀末～8世紀代
230	池 尻	2			1		3								
231	池 尻	4		1	1		6								
232	池 尻														
233	不 明														
234	コカバナ	1			2		3								
235	コカバナ				4		4						1		
236	コカバナ	1		1	2		4					1			銅壺一室町時代
237	不 明														
238	長路ヶ埜				3		3								
239	中 ツ カ				2		2								
240	中 ツ カ														
241	カマノギ														
242	カマノギ	1			1		2								
243	カマノギ				1		1								
244	カマノギ				1		1								
245	カマノギ	3					3								
246	足 タ バ				1		1								
247	足 タ バ	1					1								
248	越 中 田	1			1		2								
249	池 谷 口	1					1								
250	ヒ ロ タ		1		2		3								播鉢一室町時代～江戸時代
251	岩 ハ チ				3		3								
252	ヒ ロ タ			1	3		3								
253	ヒ ロ タ				1		2								
254	ヒ ロ タ				1		1								
255	不 明				5		5								
256	ヒ ロ タ				3		3								
257	垣 外				1		1								
258	竹ノハナ				2		2								
259	本 松				1		1								
260	足 サ バ				2		2								
261	湯 口				1		1								

茶屋川水系

262	的 場				1		1								
263	フノダ														
264	フノダ														
265	フノダ														
266	フノダ														
267	フノダ														
268	崎 屋 谷														
269	犬ノ谷														
270	犬ノ谷														
271	犬ノ谷				1		1								

次いで鎌倉～室町時代である。

i 縄文～弥生時代

この時期に属する遺物は、石器が主で、土器類は存在しない。石器の分布は、釈迦坊川両岸にも見られる。

縄文時代に属する石器は、石鏃、削器、剥片類が主で、チャート、サヌカイトを使用する。釈迦坊川水系で主に採集でき、茶屋川水系では一点のみである。釈迦坊川水系では、石器は全域に分布する。

弥生時代に属する石器は、茶屋川水系には一点も認められず、釈迦坊川水系に集中して分布する。

ii 古墳時代～奈良時代

土師器、須恵器、土錘などがある。

古墳時代に属する遺物は、須恵器や土錘がある。土錘は両水系の海岸部に近い地点で採集される。須恵器は、6世紀から8世紀の時期のもので、量的には飛鳥～奈良時代が多い。茶屋川水系、釈迦坊川水系共に海岸部、下流域で採集できる。

iii 平安時代～鎌倉・室町時代

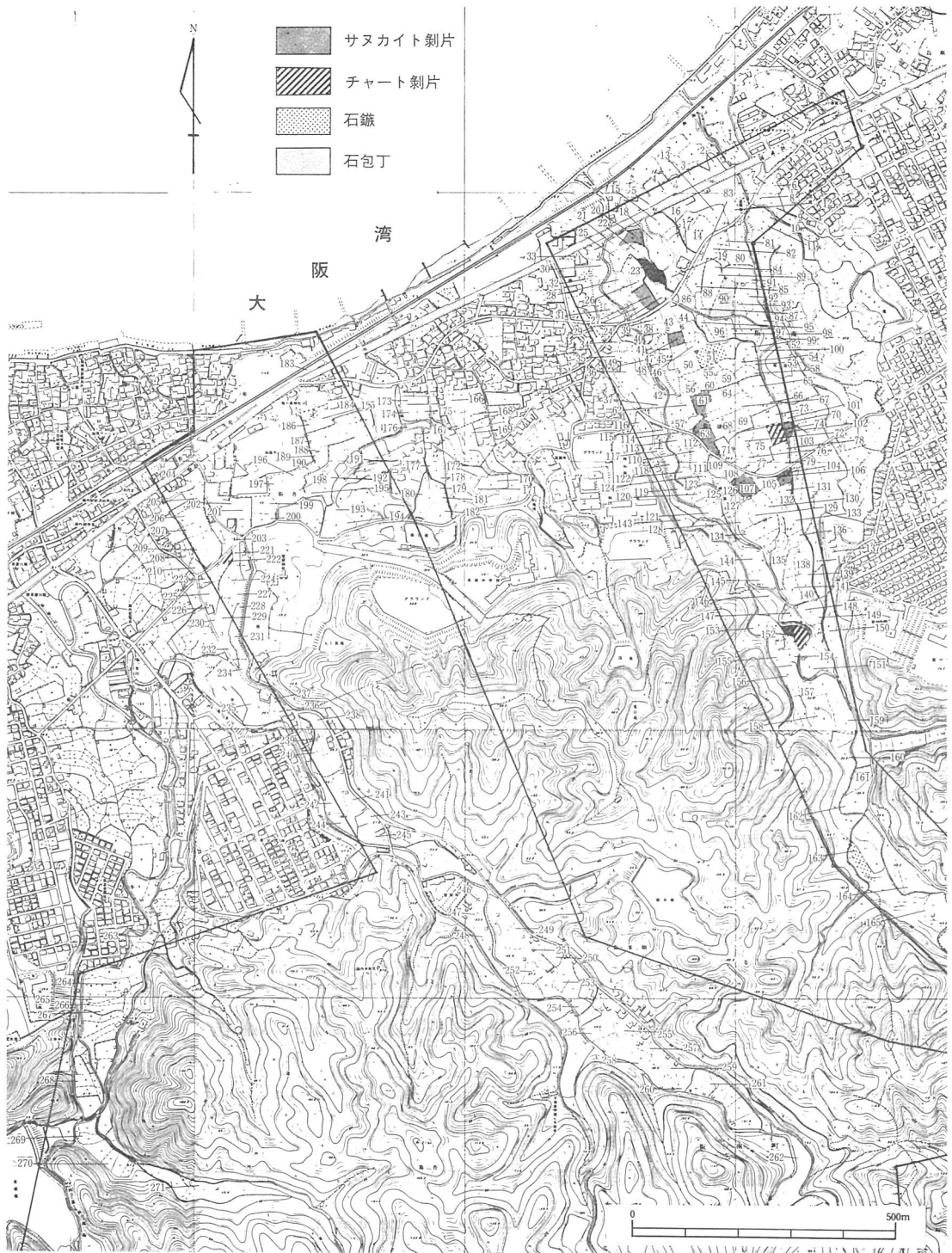
平安時代の遺物は、黒色土器があるが、量的には極めて微量である。釈迦坊川水系で採集できる。

鎌倉時代から室町時代にかけては、瓦器、須恵器、陶磁器、瓦、土錘、蛸壺などがあり量的にも江戸時代に次いで多量に採集された。瓦器は、両水系共に全域に分布する。中世陶磁器は、瓦器の分布と重なるが、量的には少ない。細長棒状土錘は、全域で採集でき、上下流域の区別はない。瓦は、全域で採集できる。

3 分布調査成果と方法論の検討

分布調査の対象地は、和泉南端、男里川より更に南方に位置する。地理的には、和泉地域南端で、「紀伊」に隣接する。この地域は、和泉山脈が海岸近くに迫り、平野部は少ない。山岳、丘陵及び海によって四囲を画され、一つの完結した地域である。

今回の分布調査は、空港建設に伴う大規模開発を前提として出発した。我々はこの点をまず自覚し、選定された調査範囲の中で、出来る限りの調査の課題と目標を設定した。これは、分布調査とは単に試掘調査や本調査の前段階に位置づけられる調査法ではなく、「一定の地域に群在する遺跡について、あくまでもその現状を変更する事なく、その基本的な構造（主要遺構、伴出遺物、その範囲と動向など）と周辺遺跡との関係を適確に把握



第5図 石器・剥片類散布地点分布図



第6図 須恵器・土錘散布地点分布図



第7図 東播系播鉢・瓦器散布地点分布図

しようとする観察の方法⁽¹⁾と認識するからに他ならない。

分布調査の実施にあつては、選定された調査範囲と季節的影響の中で、山地部分と平地部分に大きく二区分される対象地別に調査方法を選択した。

山地部分については、分布調査時期の関係から雑木、雑草類の繁茂にはばまれたが、少なくとも尾根線と谷筋については完全な踏査を実施し、山城跡、石切場跡、石造物など多くの遺跡と遺物を確認できた。

平地部分については、現状が水田、畑、果樹などで構成されており比較的均等な面積で成り立っている。それ故、田畑一枚を一単位として遺物採集を実施し、時期別分布の傾向や密度の把握のための基礎資料とした。実施にあつては、踏査時期の点から二毛作の時期に該当し、一単位にそれぞれ条件の違い（水田の状態のもの、水田が玉ねぎ畑になり地表面が掘りかえされた状態のもの）が生じ、その点を記録にとどめるのを怠ったりはしたが、総体として中世～近世を主とする多数の遺物を採集できた。

茶屋川、釈迦坊川両水系に展開する遺跡群の動態を把握する作業は、今回の分布調査を契機に開始されたと考えられる。

(1) 萩本勝「2 調査の準備と進め方」『岡村遺跡確認調査概報』海南市教育委員会 1980

第4節 ま と め

ここでは分布調査対象地内の平地部について、前述した遺物の散布状況が示す意味を考えてみたい。

地理的には茶屋川・飯ノ峯川流域と釈迦坊川流域の二つに分けられる。前者については海岸部に面した段丘上及び谷の開口部付近で散布密度が高い。特に飯ノ峯川右岸の「菅原神社」周辺部からは、古墳時代から鎌倉時代にかけての遺物が多く採集された。この範囲については、一つの遺跡として捉えることが可能ではなかろうか。茶屋川・飯ノ峯川の中流及び上流部では、中世の遺物が部分的に散布しているもののほとんどが近世に属していた。釈迦坊川流域についても、下流域と海岸部に近接した段丘面での散布密度が高い。この部分は「貝掛遺跡」の周辺部に相当しており、遺跡の範囲が広がるものと思われる。时期的には縄文時代から江戸時代にかけての遺物が採集された。またこの地域は茶屋川・飯ノ峯川流域と異り、中流部で中世の遺物が広範囲に散布している。

両地域を比較した場合、海岸部に隣接した部分での状況には共通性がある。しかし中流域（谷中央部）のあり方には、相違が認められた。分布調査の結果のみで判断した場合、

釈迦坊川流域の方が茶屋川・飯ノ峯川流域より、早くから開発が進んだようである。その理由としては、谷の広さの違いがまず挙げられよう。それに加えて、地形的な要因によって生ずる水害等の影響も考えられる。特に飯ノ峯川流域は江戸時代に洪水が起き、かなりの被害がでている。少なくとも古墳時代以降については、両地域とも海岸平地部より開発が開始されたようである。「谷中央部分」の利用及び耕地化は、釈迦坊川流域の方が先行するものの、中世以降になって進展するようである。

このような展開は、当地域の西方に位置する田山川流域、番川流域と類似している。前者は田山⁽¹⁾遺跡で、後者は番川下流遺跡及び淡輪⁽²⁾遺跡等⁽³⁾でそれぞれ確認されている。またこれらの地域は、地形的にも共通している点が多い。男里川流域より西側では、海岸平地部が極端に減少する。地理的な制約によって可耕地が限定されたために、漁業への依存と同時に背後に延びる「谷」の開発を積極的に行ったと考えられる。

分布調査の結果から導き出された以上のような課題は、今後の発掘調査によって検証されるであろう。それに加えて今後の調査は、より多くの歴史的事実を我々の前に提示してくれるものと確信している。この地域の具体的な歴史像の端緒が、見え始めたところである。

- (1) 『田山遺跡』財団法人大阪文化財センター 1983
- (2) 『岬町遺跡群発掘調査概要』大阪府教育委員会 1978
- 『淡輪磯山古墳群』摂河泉文庫 1980
- (3) 『淡輪遺跡発掘調査概要』I～VII 大阪府教育委員会 1979～1986

第IV章 試掘調査の成果

第1節 茶屋遺跡

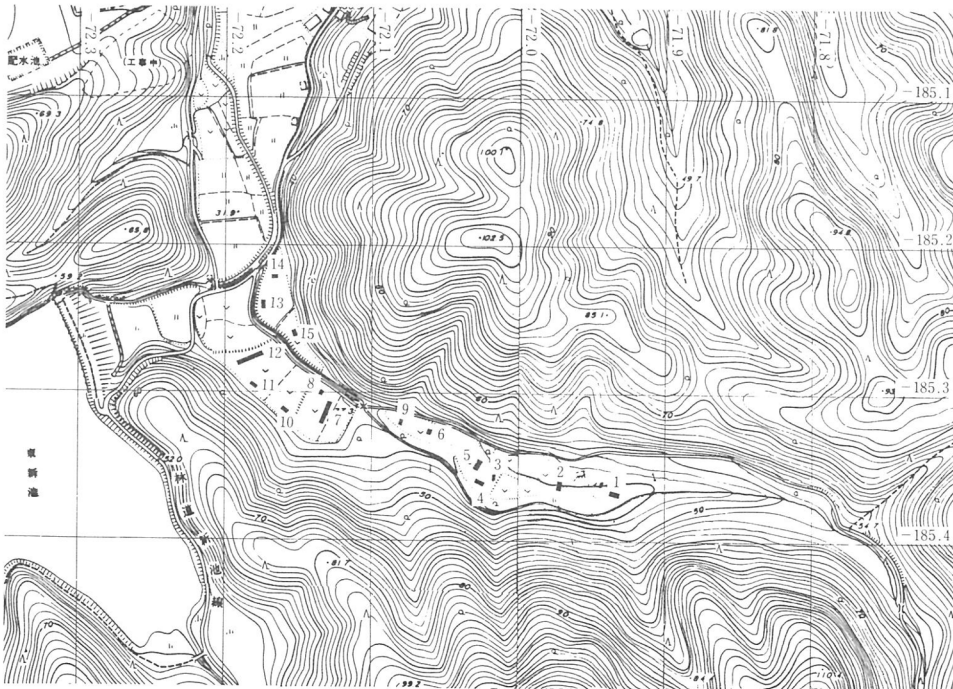
1 概要

試掘地は阪南町箱作にあり、万葉台団地西側の茶屋川が流れる谷を約0.7kmさかのぼった地点から東南へ弯曲するせまい谷部の沈砂池・調整池建設予定地である。谷底平地の水田・畑から遺物が採集されている。現況は畑地で、15個所のトレンチを掘削したが、作付されていない部分を選んだので、トレンチの配置に若干の疎密が生じた（第8図）。

2 各トレンチの調査

第1トレンチ 幅2.9m、長さ5.5mのトレンチである。耕土下には褐灰色粘質土（約10cm）、黄灰色砂質シルト（約10cm）が堆積し黄褐色粘土（礫含む）の地山に至る（第9図）。

第2トレンチ 第1トレンチの約30m北西の一枚下段の畑に設定したトレンチである。土層の状態は第1トレンチと同様で、耕土、灰黄色砂質シルト、褐灰色粘質土の順に堆積し、地表



第8図 茶屋遺跡トレンチ位置図

下30～50cmで明褐色粘土の地山になる。時期不明の土師器細片2、須恵器細片1が出土した。

第3トレンチ 耕土下の褐色粘土を第1、2トレンチの結果から地山と考えて掘削を中止して埋戻したが、その後掘削した第4トレンチの所見からこれは地山ではないと考えられる。ほぼ中央部で礫を充填した排水施設を確認した。

第4トレンチ 耕土、黄橙色粘土(床土)の下は灰黄色シルト系(20～40cm)、黄褐色砂礫系(70～100cm)の層が堆積し、その下は灰色～青灰色の砂礫層である。地表下1.5mまで掘削したが湧水があり地山まで達しなかった。上部の灰黄色シルト層から2点の土師器細片が出土したが時期判定不能である。黄褐色砂礫、青灰色砂礫は下に向かって傾斜している(第9図)。

第5トレンチ このトレンチは第3トレンチと同様耕土と床土を掘削したのみである。第3、5トレンチを埋戻した後に第4トレンチを掘削したところ前記の結果を得た。従って本来はもっと掘削するべきであるが、第4トレンチに近接しているうえにすでに埋戻してしまっているため再掘削しなかった。

第6トレンチ 耕土下には黄褐色～灰褐色の粘土層が堆積し、地表下約1.1mで青灰色砂礫層になる(第9図)。

第7トレンチ 耕土下には黄褐色系の土層が平均40cmくらいの厚さでは堆積している。その下は灰色砂礫層(約50cm)で、その下は暗青灰色シルトになる。

第8トレンチ 約25cmの耕土の下には20～30cmの灰黄色土が水平に堆積する。その下は灰白色粘質シルト、黄橙色粘質シルト、にぶい黄色微砂が、かつて自然流路を形成していたかのような状態で堆積する。地表下約1mで青灰色砂礫層になる。

第9トレンチ 耕土、床土の下には黄褐色～灰褐色の粘土、シルト、砂礫層がおおむね東北から西南へ傾向して堆積し、地表下1.6mで暗青灰色砂礫層になる(第9図)。

第10トレンチ 上から耕土(約15cm)、黄褐色粘土(約30～40cm)、暗青灰色砂礫(30～40cm)、暗緑灰色砂礫層(90cm以上)の順に堆積している。山に近いいためか地下水位が高く暗青灰色になるレベルが高い。

第11トレンチ 地表下1.7mまで掘削した。耕土、床土下は3枚の粘土層がほぼ水平に堆積している。これは旧耕土の可能性も考えられる。その下は10～30cmの黄褐～灰褐色のシルトか粘土が南東から北西の方向にゆるく傾斜している。その下は青灰色系の砂礫層でやはり南東から北西の方向にゆるく傾斜しながら堆積している。

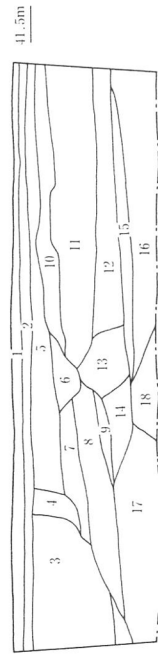
第12トレンチ 沈砂池予定地の北端に近い。耕土の下は明黄褐色砂礫土(60cm)、黄橙色シ

第1トレンチ南壁



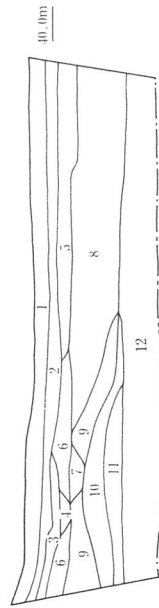
1. 褐灰色 (10YR 4/1) 土 (耕土)
2. 褐灰色 (5YR 6/1) 粘質土
3. 黄灰色 (2.5YR 5/1) 砂質シルト
4. 黄褐色 (10YR 5/8) 粘土

第4トレンチ北壁



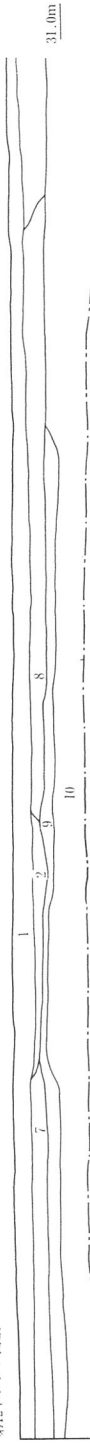
1. 灰褐色 (7.5YR 4/2) 土 (耕土)
2. 黄褐色 (10YR 7/8) 土
3. 灰色 (5Y 6/1) 粘土
4. 灰黄色 (2.5Y 6/2) シルト
5. 灰黄色 (2.5Y 6/2) シルト
6. 浅黄色 (2.5Y 7/3) 微砂
7. にぶい黄褐色 (10YR 7/4) 砂礫
8. 黄褐色 (7.5YR 7/8) 混礫土
9. 灰黄色 (2.5Y 6/2) シルト
10. 黄褐色 (7.5YR 7/8) 混礫土
11. 黄褐色 (7.5YR 7/8) 混礫土
12. 黄褐色 (2.5Y 5/3) 砂礫
13. 灰色 (5Y 5/1) 粘質シルト
14. 灰褐色 (5YR 5/2) 粗砂 (混礫)
15. 褐色 (7.5YR 7/6) 砂礫
16. 灰色 (5Y 5/1) 砂礫
17. にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 砂礫
18. 暗青灰色 (5B 3/1) シルト (混礫)

第6トレンチ東壁



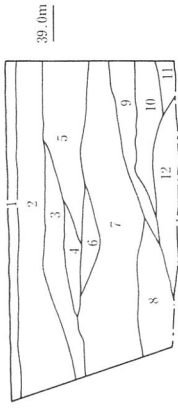
1. 黒褐色 (7.5YR 3/1) 土 (耕土)
2. 明黄褐色 (10YR 6/8) 土 (弱粘質土)
3. 黄灰色 (2.5Y 5/1) 粘質土
4. 灰色 (5Y 5/1) 土
5. 褐灰色 (10YR 5/1) 粘土
6. 黄褐色 (2.5Y 5/6) 粘土
7. 浅黄色 (2.5Y 7/3) 粘土
8. オリーブ褐色 (2.5Y 4/6) 粘土
9. 暗褐色 (7.5YR 3/4) 粘土
10. 明褐色 (7.5YR 5/8) 粘土
11. 灰白色 (5Y 7/1) 粘土
12. 青灰色 (5BG 5/1) 粘土

第12トレンチ西壁



1. 灰褐色 (7.5YR 5/2) 土 (耕土)
2. 黄色 (2.5Y 8/8) 土
3. 灰オリーブ色 (5Y 6/2) 混礫微砂
4. 浅黄色 (5Y 7/3) 粘質シルト
5. 黄褐色 (10YR 7/8) 粘質シルト
6. 灰色 (5Y 6/1) 粘質シルト
7. 黄色 (2.5Y 7/8) 混礫土
8. 淡黄色 (5Y 8/3) シルト
9. 淡黄色 (5Y 8/3) シルト
10. 灰色 (10Y 6/1) 砂礫

第9トレンチ西壁



1. 黒褐色 (2.5Y 3/1) 土 (耕土)
2. 褐灰色 (10YR 4/1) 弱粘質土
3. 明黄褐色 (2.5Y 6/6) 砂質シルト
4. 褐灰色 (7.5YR 4/1) 粘土
5. 明黄褐色 (2.5Y 6/8) 粘土
6. にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 粘土
7. 灰オリーブ色 (5Y 5/3) 粘土
8. 褐色 (7.5YR 4/6) 砂礫土
9. 明褐色 (7.5YR 5/8) 砂質粘土
10. 褐灰色 (7.5YR 6/1) 砂質粘土
11. 暗緑灰色 (10G 4/1) 砂質シルト
12. 暗青灰色 (10BG 3/1) 粘土



第9図 茶屋遺跡トレンチ断面図

ルト（50cm）となるが、トレンチの大部分はこの2層を切る窪地でその中に灰褐色ないし黄褐色のシルト層が堆積している。窪地の下底部には自然木の倒木がみられるが遺物はない。黄褐色シルトの下（GL—1.2m）では青灰色系のシルトから砂礫層になる。トレンチ東北端でGL—4mまで掘削し岩盤に達した。その間は暗青灰色砂礫が厚く堆積している（第9図）。

第13トレンチ 耕土、床土下には黄色系のやや砂質の土層が0.7～0.8mの厚さで堆積している。これは水田造成時の盛土かもしれない。その下は灰色砂礫層（約60cm）があり、その下は暗青灰色砂礫である。

第14トレンチ 第13トレンチとほぼ同様であるが、水田の肩部（法面）に近い西端部では黄褐色砂質シルトが下層を切って落込んでいる。

第15トレンチ 2×2mの小さなトレンチで、GL—0.6mまでしか掘削していない。耕土、床土の下は黄褐色砂質シルトで第13、14トレンチと共通する。

3 ま と め

谷奥部の第1・2トレンチでは地山は浅く耕土・床土の直下である。3トレンチから西になると、耕土・床土の下に数10cmの黄褐色系の堆積層があり、その下は青灰色の砂礫層になる。これらの層は谷の両側から中央へ、あるいは谷奥から谷口に向かう傾斜をもち、自然堆積であることを示す。

遺物は第2・4トレンチからきわめて少数の土器細片が出土したのみで時期等はわからない。耕土あるいは耕土直下からの出土である。遺構は第3・11トレンチで礫を充填した溝状の排水施設を検出した。現代に近い時期のものであろう。それ以外の遺構はない。

第2節 稲 丸 遺 跡

1 概 要

試掘調査地点は飯ノ峯畑の集落から約0.5km上流部から東に入る谷及びその北側の丘陵の尾根である。谷部は2号進入路、丘陵部は資材倉庫の建設が予定されている（第10図）。

丘陵部は井山城の一郭をなす可能性が考えられている。また、周辺で、和泉砂岩製の石仏4体・石祠1基が確認されている（第11図）。石仏は墓地へ向かう小径に沿って置かれている。石祠は飯ノ峯川からの取水口のそばにある。これらの年代は、墓標の年号から江戸時代後期以降のものと推定される。

2 各トレンチの調査

第1トレンチ 資材倉庫予定地東側の尾根上に十文字に設定した。表土直下で岩盤となり

遺構・遺物は存在しない。

第2トレンチ 資材倉庫予定地西側の尾根筋に沿った長さ54.4mのトレンチである。薄い表土の下は岩盤であり遺構・遺物は検出されなかった（第12図）。

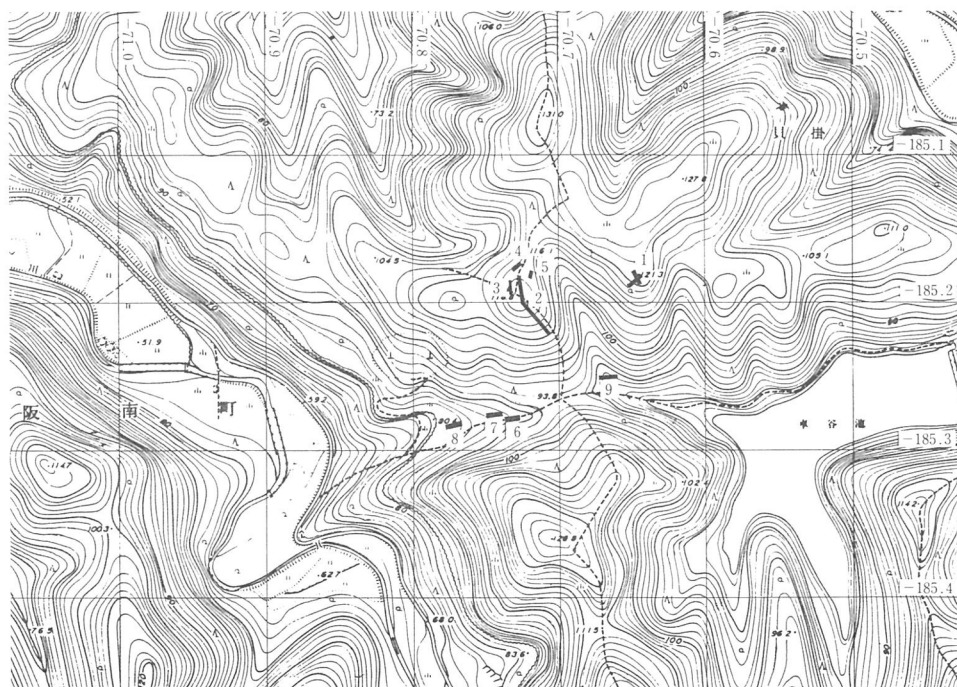
第3トレンチ 第2トレンチの西側に位置する堀割状の窪みに直交するトレンチである。下底面には暗黄褐色土がやや厚く堆積するのみで、その部分以外では10cm前後の表土直下が岩盤で遺構・遺物は存在しない。

第4トレンチ 第3トレンチの北にあり、尾根上平坦面の北西縁に設定した。表土直下が岩盤で遺構・遺物は検出できなかった。

第5トレンチ 尾根上平坦面の北東縁に設定したトレンチである。表土は岩盤を薄く覆うのみで遺構・遺物は存在しない。

第6トレンチ 2号進入路予定地の谷筋に設定した幅2m、長さ10mのトレンチである。地表の傾斜に平行に黄色～黄褐色の軟かいシルト質の層が堆積している。深さ1.5mでかなり固結した灰白色シルト層に達した。遺物は出土しなかった（第12図）。

第7トレンチ 第6トレンチの西の長さ10mのトレンチである。深さ約1mまで掘削した。土層堆積状況は第6トレンチに類似する。



第10図 稲丸遺跡トレンチ位置図

0 100m

第8トレンチ 第7トレンチの約30m西の谷の入口に近い部分に設定した。このトレンチも黄褐色系のシルト質のあまり固結してない層が地表の傾斜に平行に堆積している。時期不明の土師器細片が1点出土した。これが稲丸遺跡の唯一の遺物である。

第9トレンチ 東西尾根間の平坦部に設定したものである。約1.8m掘削した。上から明黄褐色微砂質土（70cm）、黄橙色シルト質土（30cm）、にぶい黄色砂礫土（80cm）が地表面に平行に堆積している。遺物はない。

3 ま と め

昨年度の分布調査において、和歌山方面へ抜ける間道を挟んで対峙する山頂部分が井山城跡の一郭である可能性が高いと考えられていた。これは、山頂部における平坦地の存在と山頂部付近の地形変換線付近にみられる溝状の窪地が認められることによって推定されたものである。

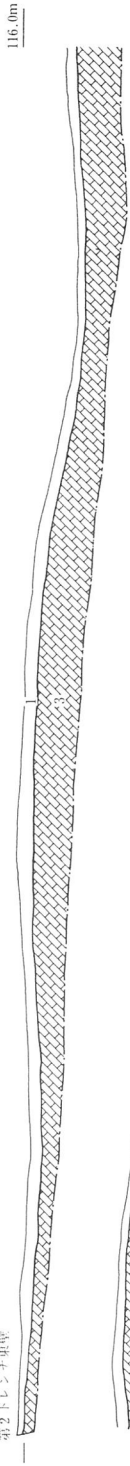
しかしながら、今回の試掘調査により、屋根上の平坦部分および溝状の窪地が人為的な造成もしくは掘削により造り出されたものとは考えがたく、また、遺物も検出しえなかったことから井山城跡関連施設として認めることができないと判断される。

一方、谷部分における平坦地は、等高線の走向からみても自然の埋没によって形成されたものとは考えがたい。今回の部分的な試掘調査においては、建造物等の存在を推定するような資料、造成の痕跡を見出すことはできなかったが、周辺に寺院が存在したとの伝承が遺されており、調査地点以外に所在した可能性が高い。この推定を裏づけるものとして、谷平坦部北側に江戸時代後期から形成された墓地が存在し、この内に僧侶の墓と考えられる無縫塔が10基程度含まれ、その、紀年銘が継続していることなどをあげることができる。



第11図 稲丸遺跡周辺の石仏・石祠

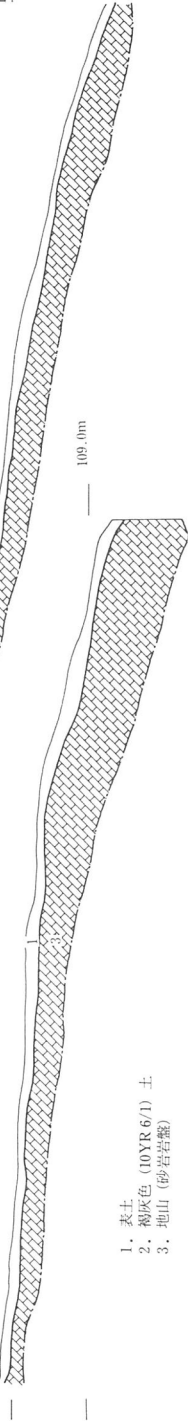
第2トレンチ東壁



115.0m



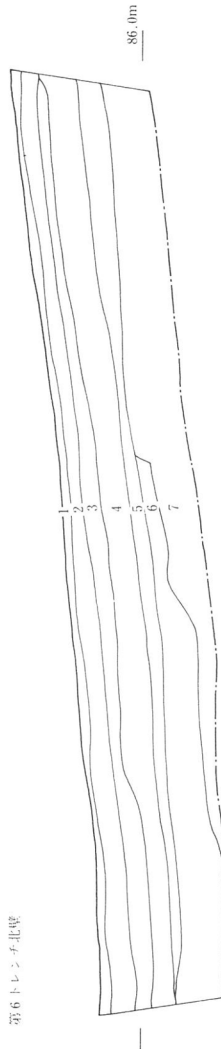
111.0m



1. 表土
2. 褐色 (10YR 6/1) 土
3. 地山 (砂岩層)



第6トレンチ北壁



1. にぶい、黄褐色 (10YR 4/3) 土
2. 明黄褐色 (2.5Y 7/6) 土
3. 浅黄色 (2.5Y 7/4) 土
4. 浅黄色 (2.5Y 7/4) 土
5. にぶい、黄色 (2.5Y 6/3) 土
6. にぶい、黄色 (2.5Y 6/3) 土
7. 灰黄色 (2.5Y 7/2) 土

第12図 稲丸遺跡トレンチ断面図

第3節 飯ノ峯畑遺跡

1 概要

試掘調査対象地は飯ノ峯川流域の万葉台団地南端付近から奥の長さ約1kmにわたる狭隘な谷部分で、分布調査の際、縄文時代～江戸時代の各時期の遺物が採集されている。今回は飯ノ峯川の流水による影響が比較的少なかったと推定される谷中央部および山麓の平坦部を中心に作付されていない水田部分14箇所を選択して試掘調査を実施した（第13図）。

2 各トレンチの調査

第1トレンチ 飯ノ峯畑地区谷奥に谷の走行に直交する幅2m、長さ11mのトレンチを谷ほぼ中央に設定した。GL-1.1～1.7mまで掘削し、GL-0.4～0.5mで砂岩の砂礫層に到達した。土層は谷中央部に向かって傾斜する。遺物なし（第14図）。

第2トレンチ 谷東側山寄りに谷の走行に直交する幅2m・長さ5mのトレンチを設定した。GL-0.8～0.9mまで掘削した。GL-0.8mで砂岩礫を多量に含む礫層に到達した。土層は谷中央に向かって若干の傾斜を見せる。遺物なし。

第3トレンチ 谷東側山寄りに谷の走行に平行する幅2m、長さ5mのトレンチを設定した。GL-0.8～0.9mまで掘削して、GL-0.7mで砂岩礫を大量に含む砂礫層に到達した。土層はほぼ水平堆積で下層の砂礫は谷奥に向かって傾斜する。遺物なし。

第4トレンチ 谷東側山寄りに谷の走行に直交する幅2m、長さ10mのトレンチを設定した。GL-0.7mまで掘削。GL-0.5mで砂岩礫に到達した。土層はトレンチ中央より谷中央に向かって砂礫層が傾斜をみせる。遺物なし。

第5トレンチ 谷西側山寄りに谷の走行に直交する幅2m、長さ10mのトレンチを設定した。GL-0.7mまで掘削し、GL-0.6mで砂礫層に到達した。土層はほぼ水平堆積。瓦器碗の破片数点を検出した（第14図）。

第6トレンチ 飯ノ峯畑谷に南からのびる小谷の合流部分に幅2m、長さ8m(A)・長さ28m(B)の2本のトレンチを谷の走行に直交する形でほぼ直線的に設定した。GL-1.2m～1.5mまで掘削し、一部GL-2.0mまで掘る。土層は(B)では、ほぼ水平堆積、(A)ではGL-0.8m～1.0mで大型の砂岩礫を多量に含む砂礫層に到達した。砂礫層に若干の起伏が認められる。瓦器碗の破片数点を検出した。

第7トレンチ 谷西寄りに谷の走行に直交する幅2m、長さ10mのトレンチを2本設定し、GL-0.8mまで掘削した。土層は(B)ではほぼ水平堆積をなしているが、(A)では谷中央に向

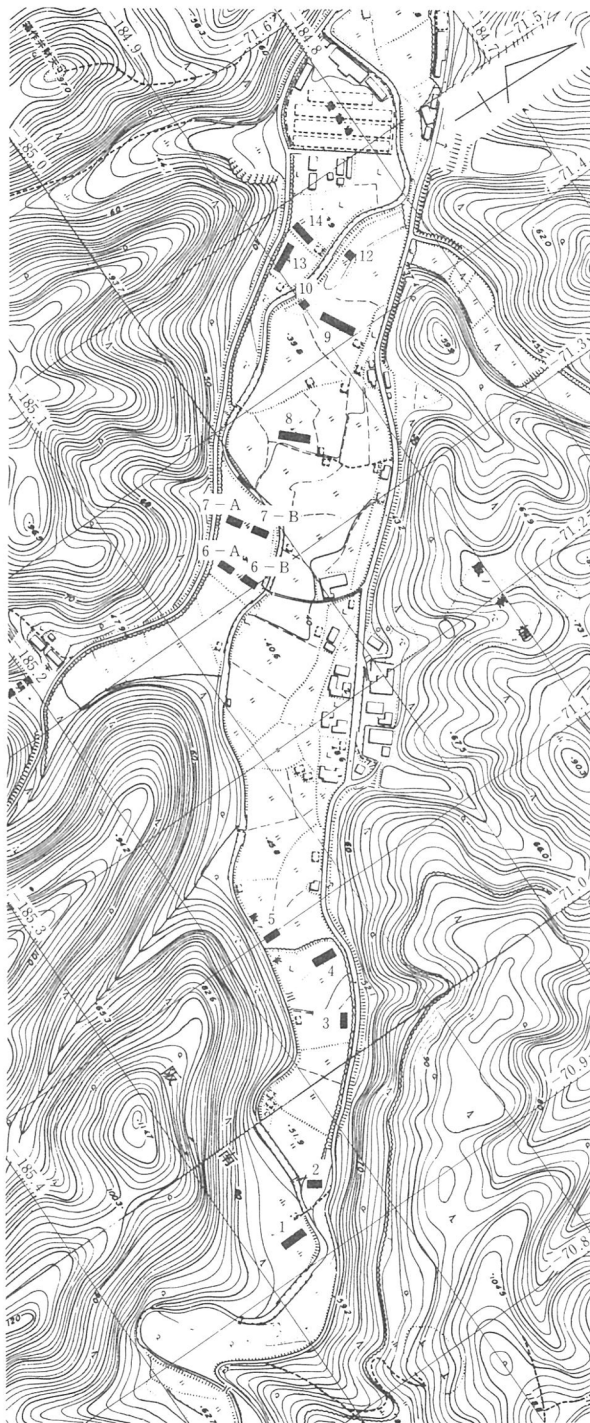
かって傾斜を見せる。遺物なし。

第8トレンチ 谷中央部に谷の走行に直交する幅2m、長さ10mのトレンチを設定し、GL-1.0mまで掘削した。トレンチ西側で谷中央に向かって急激な傾斜をみせ、拳大の礫を多量に含む層に到達した。瓦器碗の破片数点を検出した。

第9トレンチ 谷東寄りに谷の走行に直交する幅2m、長さ15mのトレンチを設定し、GL-0.9mまで掘削した。GL-0.6mで人頭大の礫を多量に含む礫層に到達。上層は粘土、シルトを基調とする水平堆積である。トレンチ東側床土下で人頭大の砂岩礫を入れた現代暗渠を検出した。遺物なし（第9図）。

第10トレンチ 谷中央、飯ノ峯川南側に幅2.5m、長さ3mのトレンチを設定、GL-1.4mまで掘削した。土層はシルト・粘土を基調とした水平堆積である。遺物なし。

第12トレンチ 谷中央飯ノ峯川南側に幅2m、長さ3mのトレンチを設定、GL-1.8mまで掘削した。トレンチ内で飯ノ峯川の旧河道を検出した。人頭大の砂



第13図 飯ノ峯畑遺跡トレンチ位置図

0 100m

第1トレンチ西壁



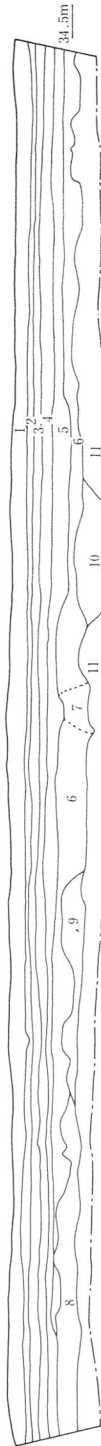
1. 黒褐色 (2.5Y 3/1) 土
2. 明黄褐色 (10YR 6/8) 土
3. 青灰色 (5YR 6/1) 粘土
4. 明褐色 (7.5YR 5/6) 粘質土
5. 灰色 (5Y 5/1) 砂礫土
6. にぶい黄褐色 (10YR 7/3) 粘土
7. 青灰色 (5BG 5/1) 砂礫

第5トレンチ西壁



1. 黒褐色 (2.5Y 3/1) 土
2. 灰白色 (7.5Y 7/1) シルト
3. 黄色 (2.5Y 8/8) 粘質シルト
4. 明黄褐色 (2.5Y 6/8) 粘質シルト
5. 明黄褐色 (10YR 6/6) 粘質シルト
6. 明黄褐色 (10YR 6/8) 粘質シルト
7. オリーブ色 (5Y 6/6) 砂礫

第9トレンチ北壁



1. 黒褐色 (2.5Y 3/1) 土
2. 棕色 (7.5YR 6/8) 粘質シルト
3. 灰色 (7.5Y 6/1) 粘質シルト
4. 緑灰色 (10GY 5/1) 粘質シルト
5. 灰色 (10Y 6/1) 粘質シルト
6. 明黄褐色 (10YR 6/8) 粘質細砂
7. 青灰色 (5B 6/1) 粘質細砂
8. 灰色 (10Y 6/1) 粘質砂
9. 灰白色 (10Y 7/2) 粘質砂礫
10. 青灰色 (5B 5/1) 粘質細砂
11. 青灰色 (10BG 5/1) 砂礫

第14トレンチ北壁



1. 褐灰色 (10YR 4/1) 土
2. 灰色 (5Y 5/1) 弱粘質土
3. 黄褐色 (2.5Y 5/6) 粘土
4. 黄灰色 (2.5Y 5/1) 砂質シルト
5. 灰オリーブ色 (5Y 5/3) 粘土
6. 青灰色 (5BG 5/1) 砂礫



第14図 版ノ茶畑遺跡トレンチ断面図

岩礫を約0.9mの高さまで積みあげた護岸施設が存在する。その築造時期は出土遺物もなく不明である。

第13トレンチ GL—1.0mまで掘削、GL—0.6mで人頭大の砂岩礫層に到達した。土層はほぼ水平堆積である。土師器・瓦器碗の破片数点を検出した。

第14トレンチ 飯ノ峯川左岸の今回の調査では最も下流のトレンチである。GL—0.6mまでは粘土・シルトが水平に堆積し、その下は青灰色砂礫層である（第14図）。

3 ま と め

調査箇所が休耕地に限られていたためトレンチの設定に精疎の差が大きく、十分とはいいがたいが今回の実施した試掘調査では、遺構の存在を確認することはできなかった。ほとんどのトレンチで現地表面から浅いところで約0.5mで人頭大の砂岩礫を多量に含む礫層に達している。今回の限られた知見からすると、これらの礫層は比較的新しく形成された可能性が高く、検出された遺物の時期、量などからもこのことを裏づけることができると言えよう。

第4節 金剛寺遺跡

1 概 要

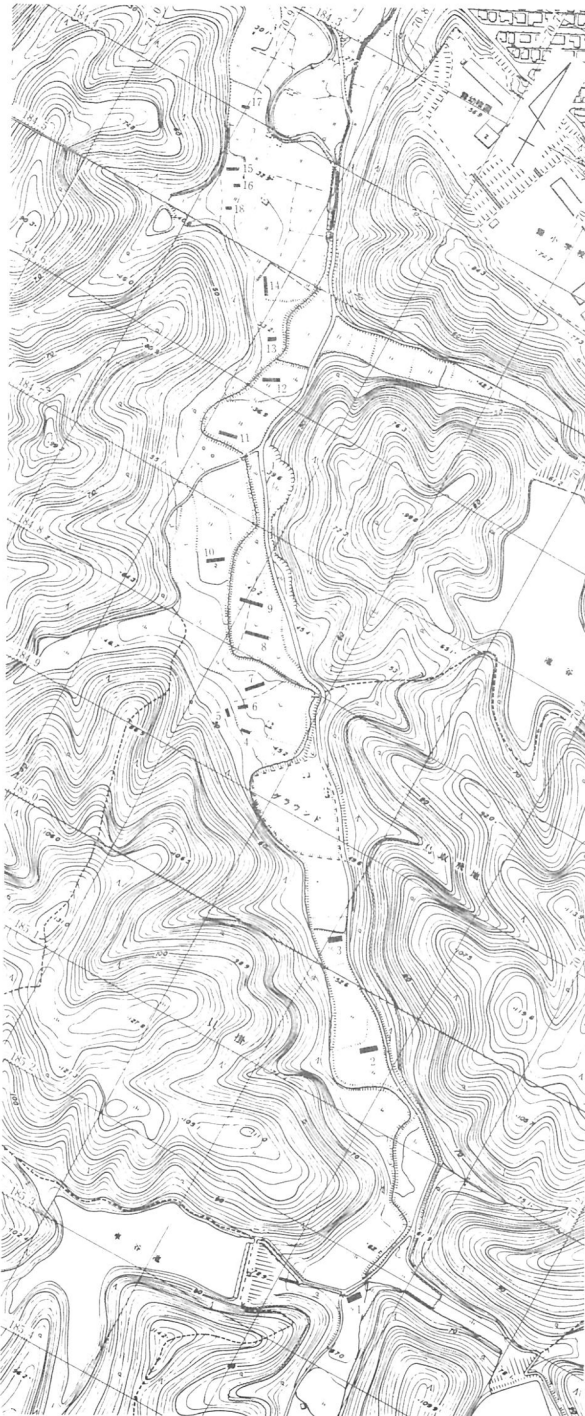
調査地は、阪南町貝掛の釈迦坊川によって形成された開析谷部分で、1号進入路及び釈迦坊川沈砂池等の予定地である。昭和60年度に実施した分布調査では、縄文時代から江戸時代にかけての遺物が採集されている。また、現在の舞幼稚園の所在する東側斜面部分では3基の円墳からなる塚谷古墳群が所在し、また寺院が洪水によって廃絶したとの伝承をもつ地域である（第15図）。

2 各トレンチの調査

第1トレンチ 釈迦坊川が形成する谷に東から合流する小谷部分に幅2m、長さ10mのトレンチを設定し、GL—1.5mまで掘削、土層断面はほぼ水平堆積でGL—1.3mで砂岩礫層に達する。

第2トレンチ 谷の走向に直交する幅2m、長さ10mのトレンチを設定し、GL—1.0mまで掘削した。灰色粘土層、黄褐色土層等が山側から谷側に向けて傾斜で堆積している。遺物は出土しなかった（第17図）。

第3トレンチ グランド東側、谷の走向に直交する幅2m、長さ10mのトレンチを設定し、GL—1.1mまで掘削した。上部の約30cmは旧耕土等の水平堆積、それより下部の東半分は



第15図 金剛寺遺跡トレンチ位置図

0 100m

青灰色粘土、西半分は水平堆積を切って灰褐色系の砂礫層が堆積している。遺物は出土しなかった。

第4 トレンチ 谷の走向に直交する幅2m、長さ5mのトレンチを設定、GL-0.8mまで掘削した。土層は谷中央部に向かって若干の傾斜をみせるトレンチ北側床土下に、現在の暗渠を確認した。第3層より土師器13点、瓦質甕2点、瓦器椀21点検出された、細片のため図化しえない。

第5 トレンチ 山際に谷の走向に平行する幅2m、長さ6mのトレンチを設定し、GL-0.9m層まで掘削した。土層は谷中央に向かって若干の傾斜をみせる。第4層より土師器2点、瓦器椀2点出土している。瓦器椀は磨滅が著しく暗文等はみられないが、外面わずかに指おさえがみられる。復元口径13.4cmを測る。13世紀代と考えられる(第16図、図版8)。



第16図 第5トレンチ出土瓦器

第2トレンチ南壁



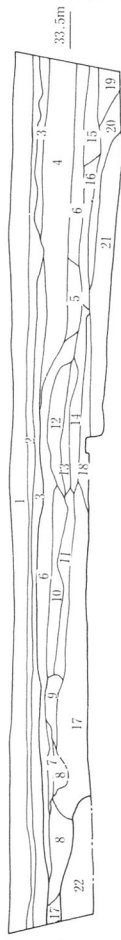
1. 褐灰色 (10YR 4/1) 土
2. 明褐色 (7.5YR 5/5) 粘土
3. にぶい黄褐色 (10YR 6/3) 弱粘質砂質土
4. 灰黄色 (2.5Y 6/2) 粘質土
5. 灰色 (7.5Y 5/1) 粘土
6. 黄褐色 (2.5Y 5/3) 砂礫
7. 灰白色 (5Y 7/1) 礫

第8トレンチ南壁



1. 黒褐色 (2.5Y3/1) 土
2. 黄褐色 (10YR8/6) シルト
3. 灰黄色 (2.5Y7/2) 砂礫 (数センチから拳程度の礫を多量に含む)
4. 深い棕色 (5 YR8/4) 細砂 (瓦を多数含む)
5. にぶい棕色 (5 YR6/4) 細砂
6. 棕色 (7.5YR6/6) 細砂 (数センチ大の礫を若干含む)
7. 棕色 (7.5YR6/6) 細砂
8. 黒褐色 (10YR3/2) 砂礫 (数センチから拳大の礫を多量及び瓦を含む)
9. 明褐色 (7.5YR5/6) 細砂 (瓦器、土師器を含む)
10. 明褐色 (7.5YR6/4) 砂礫 (数センチ大の礫を若干含む) (瓦器、土師器を含む)
11. にぶい棕色 (5 YR6/4) 砂礫 (数センチ程度の礫を多量に含む)
12. にぶい棕色 (7.5YR7/4) 細砂 (数センチの礫を若干含む)
13. 棕色 (7.7YR7/6) シルト
14. 棕色 (7.5YR6/6) 粘質シルト
15. にぶい棕色 (7.5YR6/4) 粘質細砂 (礫を若干含む、瓦も少量含む)
16. 棕色 (7.5YR7/6) シルト
17. 褐色 (7.5YR4/6) 砂礫 (数センチの礫を多量に含む)
18. 淺黄棕色 (10YR8/3) 粘質シルト
19. にぶい棕色 (7.5YR5/4) 粘質シルト
20. 棕色 (7.5YR7/6) 粘質シルト
21. 明黄褐色 (10YR6/6) 粘質シルト (数センチの礫を若干含む)
22. 褐色 (10YR4/6) 粘質シルト (数センチの礫を多量に含む)

第15トレンチ北壁



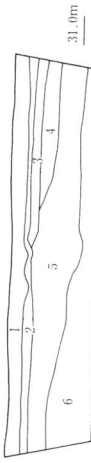
1. 表土
2. 黄褐色 (10YR 7/8) シルト
3. 明黄褐色 (10YR 6/6) シルト
4. オリブブ灰色 (5GY 6/1) シルト
5. オリブブ色 (5Y 5/4) 粘質細砂シルト
6. 灰オリブ色 (5Y 5/2) 礫
7. 褐灰色 (5YR 5/1) 砂礫
8. 青灰色 (5B 5/1) 砂

第16トレンチ北壁



1. 表土
2. 明褐色 (7.5YR 5/6) シルト
3. 明黄褐色 (10YR 7/6) シルト
4. 明黄褐色 (2.5YR 7/6) シルト
5. 棕色 (7.5YR 6/8) 粘質細砂

第17トレンチ北壁



1. 表土
2. 黄褐色 (7.5YR 8/8) 粘土 (床土)
3. 灰白色 (2.5Y 8/1) 微砂
4. 灰白色 (7.5Y 8/2) 砂礫
5. 灰白色 (5Y 8/1) 混礫土
6. 明黄褐色 (10YR 7/6) シルト

第17図 金剛寺遺跡トレンチ断面図

